

# 峰 万里恵 (うた)

齋藤 徹 (コントラバス) 高場 将美 (ギター)

2006/6/27 *Nochero*

## I

### 1. ラ・クンパルシータ

*La cumparsita* (ウルグアイ〜アルゼンチン)

詞: パスクアル・コントゥールシ  
エンリーケ・マローニ

曲: G・H・マトス・ロドリゲス

★タイトルは(カーニバルの)小さなパレード・グループのことで、アマチュアの学生が自分たちのパレード行進曲としてつくりました。後に(1924年)歌詞と新しいメロディが加えられてヒットしました。

あなたに知ってもらえたら——まだわたしは魂のなかに、あの愛情をもちつづけていることを。

見捨てられたまじしい部屋には、なぐさめに來てくれる人もなく、もう朝の太陽も窓から顔をのぞかせない。わたしに仲間になってくれたあの犬は、あなたが去ってからものを食べず、ひとりぼっちのわたしから去っていった。

あなたにわかってもらえたら……。

### 2. タンゴの街

*Barrio de tango* (アルゼンチン)

詞: オメーロ・マンシ  
曲: アニーバル・トロイロ

★ブエノスアイレスの南部の地帯は、タンゴの生まれた古里だと多くの人が信じています。この曲は、1940年代につくられ、その20年ほど前の風景への郷愁をうたっています。

ひとかけらの街が、あの南のほう、土手のわきで眠りこんでいる。踏切りの棒でゆらゆら揺れているランプ、そして汽車が種まいてゆく「さようなら」の神秘。

月に向かって、犬たちの吠える声ひとつ。玄関の軒下に隠れたあの愛。そして沼で太鼓を鳴らしている蛙たち。そして遠くにあのバンドネオンの声……。

タンゴの街——月と神秘。思い出のなかから、わたしにはふたたび、おまえが見える。

### 3. フィーナ・エスタンパ (優雅な姿)

*Fina estampa* (ペルー)

詞&曲: チャブーカ・グランダ

★ペルーでは《ワルツ》が、アルゼンチンのタンゴや、

ポルトガルのファドのように、首都の民衆文化を代表する歌謡形式になっています。この曲は、女性作者が亡き父に捧げた曲ですが、そのことは歌詞には具体的に出てきません——あるひとりの男性を讃えた曲。道行く人に、美しい声を聞かせてあげようと、鳩を入れた鳥かごが、通りに向けて出している……ここにうたわれたリマの街の情景は、1920年代のものようです。

朝露のしめりを受けたマグノリアの花たちが薫る、かわいい小道。あなたの足に、やさしくこすられると、小道はほほ笑む。そして鳩は笑い声をあげ、あの窓はからだを揺らす。あの小道をとおって、あなたの優雅な姿がそぞろ歩くとき。

優雅な姿のカバジェーロ(紳士)。帽子の下のあなたの笑顔は、明星よりも美しく、明星よりも輝いている。そしてあなたの歩みのなかで歩道は輝く、あなたが足を運ぶとき。

### 4. ヴィアナへ行こう

*Havemos de ir a Viana* (ポルトガル)

詞: ペドロ・オーメン・デ・メロ  
曲: アライン・オウルマン

★ヴィアナはポルトガルの北部、詩人の故郷です。歌詞に出てくる「シガーノ」は、ロマの人々(いわゆるジプシー)です。

神秘の影たちのあいだで、遠くで星たちがこわれているあいだに、わたしたちのバラを取り替えっこしよう。あとで、どれが誰のだか忘れてしまえるように。

花を胸に抱いて別れてゆこう。愛は風のようなもの。止まった者はどうすることもできず、その場で死んでしまう。

みどりのシガーノたちよ。おまえたちは運命を占ってくれるけれど、わたしはこう信じつづける——おかした罪は20年残る。罪を犯さなかった後悔は80年。

わたしの血は、わたしに嘘をつかないはず。空想はわたしをだますけれど。だからわたしたちはヴィアナへ行かなくてはいけない。おお、いつの日かのわたしの愛よ、わたしたちはヴィアナへ行かなければ。

## 5. ファド・ポルトウゲシュ

*Fado português* (ポルトガル)

詩：ジョゼ・レジオ

曲：アライン・オウルマン

★ジョゼ・レジオ（1901-69）は詩人・小説家・劇作家・文学批評家として、20世紀前半のポルトガル文学を代表する存在だそうです。そういう「文豪」クラスの人々の作品なのに、ファドとしてうたわれて違和感がありません。

ファドが生まれたある日そのとき、風は落ち着きなく、あちこちへ揺れていた。空が海を押し広げていった、とある帆船の甲板のところまで、とある船乗りの胸のところまで。——男は悲しさのなかでうたっていた。

またべつのある日、風は揺れてもいなかった。空が海を押し広げていった、べつの帆船の甲板のところまで。べつの船乗りが夜眠れないままに、悲しさの中でうたっていた。

頼りない帆船で大海を行く、とある船乗りの口に、痛ましい歌が死んでゆく。

「ああ、なんと大きく広がる美しさだろう！わたしの道、わたしの山、わたしの谷。あふれる木の葉、花たち、黄金の果物……。見るがいい。スペインの陸が、ポルトガルの砂が見えるか？ 涙にかすれたまなざしよ」

## 6. 黒い船〔暗いはしけ〕

*Barco negro* (ブラジル～ポルトガル)

詞：ダヴィード・モウラオン・フェレイラ

曲：カコ・ヴェーリョ & ピラチーニ

★元はブラジル曲『黒い母』で、白髪の黒人老女が、農場主であるご主人の白い赤ん坊をお守りしている内容でした。この曲をアマリア・ロドリゲスさんがうたうために、まったくべつの歌詞が付けられたのです。

朝早く目を覚ましたわたしは、顔がみにくく見えるかとかわかった。でもあなたの目は、そうではないと言っていた。わたしの心に太陽が射しこんだ！

……わたしは見た、岩の上の十字架。あなたの黒い船は光のなかで踊っていた。嵐に吹き飛ばされそうな帆のあいだで、なにかを伝えようと振られていた、あなたの両手。

……浜のお婆さんたちは、あなたは帰ってこないと言う。頭がおかしいんだ！

……窓ガラスに砂をぶつける風のなかに、うたっている水のなかに、くすぶっている火のなかに、寝台のぬくもりのなかに、わたしの胸のなかに——あなたはいつも、わたしといっしょにいる。

あなたは出発さえもしていない。わたしのまわりのすべてが、あなたはいつも、わたしといっしょにいると言っている。

## II

## 1. シェガ・チ・サウダーチ

〔想いあふれて〕

*Chega de saudade* (ブラジル)

詞：ヴィニーシウス・ヂ・モラーエス

曲：アントニオ・カルロス・ジョビン

★サウダーチは、失ったもの、そばにないもの（や人）を想うときの、甘美な悲しみの感情です。このタイトルは、そんなものはもうじゅうぶんに味わったから、もういらない、淋しいのはもうたくさん！——といったニュアンス。

行け！ わたしの悲しみ。彼女に言うておくれ、彼女がいないなんて、あつてはいけないことだと。帰っておいでと。だってわたしは、もうこれ以上くるしむことができないから。

サウダーチはもうたくさん。彼女なしに平和はない。美しさもない。ただあるのは悲しみとメランコリー、それがわたしから出て行かない。

もし彼女が帰ってきたら、なんと素適なことだろう。海を泳ぎまわっているお魚たちの数は、わたしが彼女にするキスよりも少ないだろう。

何百万もの抱擁、こんなにしっかりと、こんなにくっついて、こんなに物言わず。抱擁と小さなキス、そして愛撫に終わりなく。

あなたがわたしなしで生きるなんて、もうおしまい。こんなことは、もういやだ。あなたがわたしの遠くにいるなんて、もうこんなことはやめよう。

## 2. 亜麻の花

*Flor de lino* (アルゼンチン)

詞：オマーロ・エスポーシト

曲：エクトル・スタンポーニ

★1940年代の、若返って新鮮なアルゼンチン・タンゴを代表する作者たちによるワルツです。

彼女は夜の花びらをむしっていた、キスをひとつもらうのを、むなしく待ちながら。でもわたしは夢見ていた、熱く抱きしめる春の大地の大きなキスを……。亜麻の花、なんという不思議な運命が、花ひらく亜麻の道を断ち切ってしまったのか。

どれほどのものが去っていったことか！ そしてきょう——いつもかならず——帰ってくる、いつも夜の、わたしの孤独のなかを。

わたしは彼女が花ひらくのを見た、太陽で熟したアルゼンチンの野の亜麻のように。もしわたしが彼女のことを理解できていたなら、いまわたしの小屋には愛があるのに！ でもある日、悪魔の仕業！ わだちの跡が彼女を連れ去った。きょう野は花ざかり……。呪われたわたしには、彼女の愛がない！

### 3. 川辺の民

*Povo que lavas no rio* (ポルトガル)

詩：ペドロ・オーメン・デ・メロ

曲：ジョアキン・カンポシュ 《ファド・ヴィクトーリア》

★詩人の故郷であるポルトガル北部では、他のどこにもまして大地への信仰が深いそうです。大地はもちろん、小麦にも、パンにもワインにも聖体がやどり、祈りが捧げられます。時代とともに、こんな信仰も失われてゆくのでしょうか……。

アマリア・ロドリゲスさんが長い詩をファド用に編みなおし、昔ジョアオン・ヴィクトーリアという人がつくった形にもとづいた、カンポシュ作のメロディの流れでうたいました。

わたしは、みんなの丸いテーブルで食べた。古いほうろびきの深鍋から、人々の手から手へと渡されてきた接吻を飲んだ。わたしがもらったのはワイン、澄み切った水、野生の果実。だが人々の命はもらえなかった。

ヒースの生える原の匂い、泥の薫りといっしょにわたしはベッドに入り眠った。わたしも荒れ野となり泥になっていた。ひとびとよ、わたしはおまえのものだ。でも、おまえの命はもらえなかった。

川で洗うひとびとよ、わたしの棺にする板を手斧でけずりだす者よ、おまえの味方は出てくるかもしれない、おまえの聖なる土地を買うものが出てくるかもしれない。でも、おまえの命は、だれのものにもならない。

### 4. シギリージャ 《アルメニアの山並みへ》

*Siguiriya "A la sierra de Armenia"* (スペイン)

詞：アンドレス・モリーナ・モーレス

曲：ニコラス・カジェホン・ロペス & ペペ・ピント

★シギリージャは、ヒターノ（スペインのロマ、いわゆるジプシー）の音楽感覚の極致というべき、フラメンコの1曲種です。この曲は、フラメンコ史上に輝く大天才の女性ラ・ニーニャ・デ・ロス・ペイネスさんの録音をお手本にしました。作者として3人の名前が登録されていますが（ひとりには彼女の夫だった歌謡フラメンコの歌手）、真の創造者は彼女と、ギタリストのメルチョール・デ・マルチェーナさんだったと思われまます。

アルメニアの山中へ、わたしは行ってしまいたい。キリスト教徒だろうがイスラーム教徒だろうが、わたしのことを知っている人が、だれもいないところへ。

### 5. ファンダンゴ 《巣から取って来た》

*Fandangos "Fui al nido y la cogí"* (スペイン)

伝承曲

★ファンダンゴは、南スペインの歌付きフォークダンス。やがて、ダンスなしで、歌だけをたのしむようにもなりました。19世紀の後半には、そういう民謡をヒターノの

歌い手たちが、フラメンコ流にうたうようになりました。ここでは、フラメンコのファンダンゴの創始者のひとりマヌエル・トーレさんをお手本にしました。

今日ではもっと自由に、お話しをするようにうたわれ、そのあいだはギターはほとんど弾かないスタイルが主流です。いっぽうでは、舞曲リズムをしっかりと残して、でも歌を聞かせるスタイルも強く生きつづけています。

あなたにあげようと、巣から白い小鳩を取って来た。でも巣に残された母親は泣いていた。わたしが、あなたゆえに泣いたのと同じように。——わたしは小鳩を放した。手から出て、飛んで行った。

おだやかな海の波。ほくろがいっぱいの貝殻。もしあなたがわたしに愛をくれるなら、わたしはあなたに魂を渡す……。ああ、わが痛みの聖母マリア様、おたすけください。

### 6. コントラバス・ソロ

*Solo de contrabajo*

ソロ：齋藤 徹

★コントラバスの即興演奏です。どんな音楽を演奏するか、そのときまでわかりません。

## III

### 1. お砂糖と愛情で

*Com açúcar, com afeto* (ブラジル)

詞 & 曲：シコ・ブアルキ・チ・オランダ

★ボサノヴァ直後の、ブラジル・ポピュラー音楽をリードしたひとりシコ・ブアルキの、彼ならではのサンバです。ブラジルの女性歌手たちのなかには、すごく甘くうたう人もいれば、たいへん悲しく表現する人もいます。

お砂糖と愛情で、わたしは、あんたのお気に入りのお菓子をつくった。「それがどうした！」ってなものね。あんたはいちばんきれいなスーツを着て出てゆく。遅くはならないよ、なんて言ってもわたしは信じない。

あんたは労働者だという。給料を求めて外に出るのは、わたしを養うためだという。それが何よ！ ガレージに行く途中の角ごとにバーがある。あんたが記念の祝盃を上げるため。それ何のこと？

だれかがそばにすわる。あんたが話に乗せ、サッカー評論。それからスカートをキョロキョロ見てる。毎日ビーチで暮らして、太陽で肌の焼けた人たちね。それで夜になったからもう1杯……新しい友達が来て、昔のサンバのリズム。あんたは思い出にひたる。

疲れきってようやく、あんたは赤ん坊になって帰ってくる。許してと、わたしに泣きつく。わたしに、悩まないでと言う。生き方を変える

つもりだという。そんなに疲れてボロボロになったあんたを見て、わたしは自分がイヤになる。それからあんたの食事を温め、あんたの写真にキスをして、わたしは両腕を広げる——あんたのために！

## 2. ふたりだけのワルツ

*Valsinha* (ブラジル)

詞：ヴィニーシウス・ヂ・モラエス

曲：シコ・ブアルキ・ヂ・オランダ

★これも愛らしい曲と呼べなくはないのですが……

ある日彼は、いつもとまったくちがった風に、やってきた。いつもよりずっと熱く彼女を見つめた。人生を呪っても、いつもの口のききかたではなかった。そして彼女がとてもびっくりしたことには、ぶらぶら出かけようと誘った。

そこで彼女は自分をきれいにした、もう長いあいだ、そこまでやる勇気がなかったほど、きれにした。胸のあいたドレスにした。あんまり長く待っていたから、ダンスの匂いがしてた。それからふたりは手を取り合った。もう長いこと、そんな風にしなかったほどに。やさしさと粹にあふれて広場に向かった。そして抱きあいはじめた。

そしてそこで踊ったたくさんのダンス。近所がみんな目を覚ました。たくさんのしあわせ。街ちゅうが光り輝いた。たくさんの狂おしいキス、たくさんの声もかれた叫び。

そこで世界は理解した。そして夜明けが来た。平和のうちに。

## 3. 最後の酔い

*La última curda* (アルゼンチン)

詞：カトゥロ・カスティージョ

曲：アニーバル・トロイロ

★作者たちは、ほんとうに飲みながら（たぶんウィスキーだったと思われます）ひと晩でこの曲をつくりました。

バンドネオンよ、おまえのやくざな、しわがれた呪いの声が、わたしの心臓を痛めつける。おまえのラム酒の涙がわたしを連れてゆく、ぬかるみが反乱を起す場末の暗黒街へ。

窓を閉めてくれ。太陽が、ゆっくりした夢の渦巻きを燃やしている。おまえにはわからないのか？

わたしがいつも灰色の、アルコールの彼方の忘却の国から来たことが。

おまえが受けた刑罰のことを話しておくれ。わたしにだけ教えておくれ、忘却の継ぎ目にこぼれてしまったあの愛のことを。

わたしにはわかっている、こんな酔った説教は、自分も、おまえも傷つけていることを。でもそれは、バンドネオンが震えさせる古い愛なのだ。酔

いは最後には芝居を終わらせる。心臓に緞帳を下ろして。

## 4. 酔いどれたち

*Los mareados* (アルゼンチン)

詞：エンリーケ・カディーカモ

曲：フアン・カルロス・コピアーン

★1920年代のキャバレーの空気に満ちて、でも昇華された美しさをもつ官能的な音楽です。最初は麻薬におぼれた人たちをうたった歌詞でしたが、1940年代になって、いまもうたわれる宿命的な別れの歌詞になりました。

妖しく……まるで燃えているようだった……きみは飲んでた。そしてシャンパンのはじける音のなかで、狂おしく笑っていた、泣かないために。

今夜、わたしの女友達よ、アルコールがわたしたちを酔わせた。かまうものか、人があざ笑っても、“酔いどれども”と呼ばれようとも。

いま、きみはわたしの過去に入ってゆく、わたしの人生の過去に。そしていま、わたしたちは、わたしたちの道をとろう。これまで、なんと大きかったわたしたちの愛！でもそれなのに……ああ……残ったものを見てごらん。

だれにもそれぞれの悩みがある。わたしたちには、わたしたちの悩みがある。今夜、わたしたちは飲もう。なぜなら、もう二度とふたたび、会うことはないのだから。

## 5. 涙

*Lágrima* (ポルトガル)

詞：アマリア・ロドリゲス

曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

★アマリアさんは若いころから作詞をしていましたが、これは、ほんとうに死と向かい合っていた後年のものです。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして起きるとき、さらに悩みが大きくなっている。

あなたがきらい、わたしはあなたがきらいと言っているのだ。でも夜には、あなたの夢を見る。

いつの日か、あなたに会えないゆえに、絶望のうちに死ぬことを考えたら、わたしは土の上にショールを広げ、そのままどろんでしまおう。

もしわたしが死んだら、あなたが泣いてくれるとわかったら、あなたのひとしずくの涙のために、どんなにうれしく、わたしは殺してもらおうとすることだろう。



今夜は お聴きいただきありがとうございました。  
またお会いできるのを楽しみにしております。

——峰 万里恵、齋藤 徹、高場 将美——